

12	学校名 千葉県船橋市立若松小学校 外1校	21～23
----	----------------------	-------

平成23年度研究開発実施報告書（要約）

1 研究開発課題

小学校、中学校の9年間を通じて基礎的・基本的な内容の確実な定着を図るため、学習内容の移行、統合を含めた児童生徒の心身の発達を踏まえた教育課程の研究開発
 —「人間としての在り方生き方」教育の視点から教育課程の再構成—

2 研究の概要

学力向上や人間としての在り方生き方について、道徳教育、キャリア教育の充実、さらにコミュニケーション能力の育成など様々な課題を解決するため、9年間の発達段階を踏まえた系統性、継続性のある教育課程を編成する必要がある。そこで総合的な学習の時間と特別活動を統合した領域「在り方生き方」を新設し、人間としての在り方生き方教育の視点から現在の教育課題の解決を図ることを目指したカリキュラム試案を開発する。小学校第1学年より実施する英語学習では、特に児童生徒のコミュニケーション能力の育成に重点を置き、小中一貫カリキュラムを編成する。また一貫教育校として、義務教育9年間を見通し系統性を踏まえた教科カリキュラムを編成する。さらに、学校種の垣根を取り払い学校運営全般にわたり一元化し、その実効性や課題について分析する。

3 研究の目的と仮説等

(1)研究仮説

- 小・中学校9年間を見通した各教科・領域のカリキュラムを作成することにより、継続的、反復的な学習が可能になり、また小学校高学年より教科担任制を導入することにより、指導法や学習方法の一貫性が保たれ、児童生徒の学力が向上するであろう。
- 小学校の教科担任制や「4－3－2の区切りのカリキュラム開発」を通して、教科における指導方法の改善や指導力の向上が期待できるであろう。
- 小学校第1学年から英語科授業を導入することにより、「コミュニケーション能力」を高めるとともに「英語を話せる日本人」の基礎を培うことができるであろう。
- 様々な体験を通して「心を育てる」ことをねらいとした新領域「在り方生き方」の実践、児童生徒一人一人が自分自身の存在を確認することが、豊かな生き方につながるであろう。

(2)教育課程の特例

- 週時数を1週間で小学校第5学年、第6学年は週29時間実施、中学校第1学年から中学校第3学年は週30時間実施
- 小学校第1学年から第4学年まで英語科授業を年間35時間実施（小学校第1学年は34時間）、小学校第5学年、第6学年は英語科授業を年間70時間実施、中学校第1学年は年間155時間、中学校第2学年、第3学年は175時間実施
- 「在り方生き方」を設置し、小学校第1、2学年は、年間35時間、第3、4学年は年間70時間、小学校第5学年から中学校第3学年まで、年間105時間実施

4 研究内容

(1)教育課程の内容

①小中一貫教育

ア 6－3の区切りから、4－3－2の区切りへ変更

児童生徒の発達段階を踏まえ、義務教育9年間を従来の6－3の区切りから、4－3－2の区切りに変更し、各期の学習活動の重点事項を明確に設定した。（表1）

イ 連携・協力体制の充実

(ア) 緩やかに教科担任制へ移行

第Ⅱ期において、中学校教員による教科指導を小学校の英語，理科，図画工作で取り入れ，小・中における指導方法や学習スタイルに大きな差異が生じないようにしていくとともに，緩やかに中学校での教科担任制へ移行していきけるようにした。また，同じ時間帯に，小学校教員が，中学校数学科の授業のTTとして指導する体制を敷くことで，小学校時代から人間関係のとれていない教員に安心して生徒が質問できるようにした。

表1 各期の学習活動の重点

第Ⅰ期	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識・技能の習得 ○学習のまとめ方や家庭における課題への取組 ○学習習慣や基本的な生活習慣の確立 ○「話す・聞く」を重視したコミュニケーション
第Ⅱ期	<ul style="list-style-type: none"> ○基礎的・基本的な知識・技能等を活用 ○教科担任制による専門性を生かした学習指導 ○思考力，判断力，表現力の育成 ○「討論」を重視したコミュニケーション
第Ⅲ期	<ul style="list-style-type: none"> ○課題を設定し解決していく主体的な学習態度の育成 ○身に付けた思考力，判断力，表現力の活用 ○「説得・納得」を重視したコミュニケーション

(イ) 小学校音楽専科による中学生への指導

第Ⅰ期及び第Ⅱ期第5，6学年から児童の音楽指導に携わってきた小学校音楽専科教員が，中学校で継続して生徒を指導する体制をとることで，慣れ親しんだ教員のもとで，小学校期に培った意欲や技能を一層向上できるようにした。

(ウ) 中学校進学時の綿密な引き継ぎ

学習指導や生徒指導面での児童の良さや問題点についての引継ぎを，小学校と中学校の各学級担任に加えて，児童の教科指導に当たった中学校教員で行うことで，小・中学校それぞれの立場からの情報を基に，一人ずつ詳細に引継ぎを行い，留意事項等について明確にできるようにした。

ウ 小中学校の共通の授業づくり

義務教育9年間を連続的にとらえ系統性を明確にするとともに，板書構成やノートのまとめ方，話し合い活動の進め方など指導方法や学習方法について共通のスタイルを保つことで，指導者が変わっても授業スタイルに大きな違和感なくスムーズに学習に入っていけるようにした。

エ 小中連携の学校行事及び活動

小・中学校の担当者での話し合いを基に，目的を明確化するとともに，児童生徒の実態や発達段階を踏まえて活動内容を計画し連携活動を活性化させることで，従来以上の教育的効果が期待できる活動となるようにした。

② 在り方生き方

学ぶ意欲や人との関わり，規範意識，集団の一員としての自覚などの解決すべき今日的な課題，また，本校児童生徒に関する自信の欠如，人間関係づくりなど課題から人間形成の基礎を培う教育活動を意図的・計画的に設定し継続する必要があると考え，領域「在り方生き方」を創設した。自分自身の在り方生き方について気付き直すとともに，人との関わりを広げたり，社会とのつながりの自覚を持たせたりすることを通して，他者や社会と向き合う確かな手応えを実感させ，よりよい自分や社会を築いていくことのできる意欲や実践力を育む学びとして位置付けた（図1）。

展開するにあたって，総合的な学習の時間と特別活動を統合した。本来，趣旨や性格の異なる二つの領域であるが，一本化することにより，人間としての成長を図る学びの場を活性化できるのではないかと考えた。具体的には，様々な課題に対応して自己形成が図れるように，表2に示す「7つの内容」を設定し，これらの学びを通して個としての自立という最終的な目標達成に迫っていった。

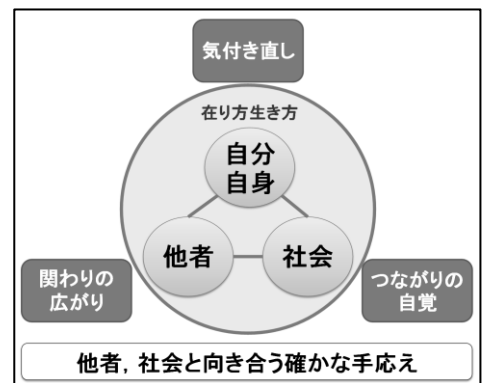


図1 在り方生き方で目指すもの

表2 7つの内容と主なねらい

7つの内容	主なねらい(身に付けさせたい能力・態度)
キャリア	○役割の遂行(学校・家庭) ○夢・希望
自分づくり	○自立心, 自律性, 規範意識
健康・生命	○健やかな心身(主として食育) ○生命・自然を大切にす心
課題の探究	○課題設定, 解決
コミュニケーション	○伝え合い ○ICT活用による発信
地域社会	○交流, 愛着, 貢献
国際理解	○他者や異文化の尊敬, 共生

ア 9年間の目標表, カリキュラム表を共有
学年ごとに発達段階や実態を踏まえて, 1年間を通して目指す児童生徒像を明確にした。また第Ⅰ期, 第Ⅱ期, 第Ⅲ期ごとに, 関わる対象(人・もの)や, よりよい自分や社会づくりの重点を決め, 段階的に人や社会との関わり方を学んだり, 生き方を考えたりできるようにした。さらに教材開発のコンセプトをキャッチフレーズ化し, 教員間で共有しやすくした。年間カリキュラム表に7つの内容について番号で明示するとともに, 年度当初に学年ごとに学習活動についてのプレゼンテーションによる提案を行い, 各単元の内容や方法を検討した。

イ 統合し, 自己形成, 人間関係力, 課題設定・解決力の3視点から評価

総合的な学習の時間と特別活動を統合することで, 人間として成長する学びに推進力を生み出したいと考えた。総合的な学習の探究的・協同的な学びと特別活動の集団活動での人間関係づくり, さらに, 自己形成という視点を加えた3つの視点を設定することで, 体験活動や交流の意味・意義をより明確にして授業展開ができるようにした。

ウ 自己や未来に目を向けた活動の工夫

自己形成に比重を置くことから道徳の内容項目との関連付けを図るとともに, 体験活動や外部人材との交流の機会を重視し積極的に設定した。また, 授業づくりにおいては, 自分たちを支えている人々, 地域や日本, 世界の文化, 社会の現実や未来などに, 学年の段階に応じて目を向けさせ児童生徒の視野を広げるとともに, 前向きに生きる人や社会のために尽くしている人の生き方に触れさせ, よりよい生き方を探求できるようにした。学習過程には「これまでの自分を振り返る」「これからの自分を考える」「学びの中で見出したことを日常や社会生活の中でどう生かし実践していくのか発信する」時間を位置付け, 自分がどのように変容にしたかを自覚できるようにした。小さな変容・成長を見逃さず評価していくことで自信や意欲を高め, 夢や希望につながるようにした。

③英語教育

ア 第Ⅰ期からの文字指導

中学入学までにアルファベットが書けることを目指し, 無理なく文字に慣れるために, 歌やカードゲーム, ビンゴなどの活動を取り入れ, 楽しく取り組みながら読み書きできるようにした。

イ ドラマ活動の位置付け

演劇の手法を取り入れたドラマ活動を英語科カリキュラムに位置付け, 積極的に英語を用いてコミュニケーション(身振りや表情などの非言語的なコミュニケーションも含む)を図ろうとする態度の育成を図った。一人一人に劇中での役割を明確に与えることで, 全員が活躍できる場面を確保した。

④教科教育

ア 教科ごと, 学年ごとの一覧表作成

イ 「在り方生き方」の7つの内容と各教科の関連

小中学校9年間の系統性を踏まえるとともに, 各教科の学習においても「在り方生き方」の7つの内容と関連を図り, 「教科」と「在り方生き方」の両面から人間形成の基礎を育成していけるように教科カリキュラムを作成した。

ウ 全教科でコミュニケーション育成の取組

言語活動の充実に向け, 全教科でのコミュニケーション能力の育成を意識した授業づくりへの改善を図った。コミュニケーション能力の育成について, 「対話」「交流」「討論」「説得・納得」の4段階に整理し, ペアやグループ, 学級単位での話し合い活動を

積極的に取れ入れた。また、調べたことやまとめたことを発表する場面を多く設定することで、特にプレゼンテーションの力を伸ばしていきけるようにした。

(2) 研究の経過

<p>第1年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小中一貫の教育目標や目指す児童生徒像を検討し、重点的取組方法、ならびに若松小中研究開発構想の構築を行う。 ・各教科領域の年間指導計画、カリキュラム作成構想（目指す児童生徒像、作成の基本的な考え、手立てと重点指導項目）、重点指導事項、各学年の目標をまとめる。 ・学習内容（発展的内容・探究的な内容など）、小中連携で系統性がある題材や単元の検討を行う。 ・小学校高学年からの教科担任制を実施する。（理科，図画工作，音楽） ・「在り方生き方」の趣旨について、教師の共通理解を図り、児童生徒像の実態の話し合いを行う。 ・「在り方生き方」の学習として、手話による福祉教育（小学校第3学年）、JICA国際協力出前講座授業（小学校第6学年）、職場体験(中学校第2学年)等を実施する。 ・中学校第3学年による小学校第2学年への読み聞かせを行う。 ・ピアサポート研修会を実施する。 ・授業研究会を2回実施する。 ・小中合同講演会（{在り方生き方を学ぶ}松本亜砂子さん）を行う。第Ⅱ～Ⅲ期合唱祭の開催、及び小学校音楽会に中学校吹奏楽部が参加する。
<p>第2年次</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・9年間を見通した学習姿勢、学習習慣の共通理解を図り、研究校としての児童生徒像の実態を話し合い、小中一貫の教育目標や目指す児童生徒像を考える。 ・「在り方生き方」の8つの能力と内容の確認を行い、本研究で目指す児童・生徒像の共通理解を図る。 ・「在り方生き方」の学習として、伝統文化（茶道・剣道・華道・着付け等）の学習（小学校第5学年）、JICA国際協力出前講座授業（小学校第6学年）、職場体験(中学校第2学年)等を実施する。 ・カリキュラム一覧表の系統・関連項目を検討し、単元の組み替え等を行い、基本的な考えや手立てと重点指導項目などの整合性の確認を行う。 ・小学校第1学年からの英語科授業の実施、並びに学習内容の検討及びカリキュラム開発を行う。（文字指導の充実を含む） ・小学校高学年からの教科担任制を実施する。（理科，図画工作，音楽，英語） ・中学校第2学年による小学校第2学年への読み聞かせを行う。 ・授業研究会を2回実施する。 ・船橋530運動として小中合同で若松地区美化活動に取り組む。 ・船橋市立船橋高等学校吹奏楽部による演奏を小中合同で鑑賞する。 ・小中合同挨拶運動、募金活動を実施する。（児童会・生徒会合同） ・小中合同講演会（{在り方生き方を学ぶ}タダシンヤさん）を行う。 ・第Ⅱ～Ⅲ期合唱祭の開催及び小学校音楽会に中学校吹奏楽部が参加する。 ・小中一貫マラソン大会を実施する。 ・新学習指導要領を踏まえた教科・領域カリキュラムの再編成を行う。基本的な考えや手立てと重点指導項目など整合性の確認を行う。 ・11月19日(金)に中間発表会を開催し、研究成果を発表する。 ・研究開発学校フォーラムにおいて、文部科学省より研究についての指導、

	<p>助言を受ける。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次年度の方向性，研究日程について確認する。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・4-3-2の区切りと9年間を見通したカリキュラム試案の実施及び検証を行う。 ・小学校高学年からの教科担任制を実施する。（理科，図画工作，音楽，英語） ・総合的な学習の時間と特別活動とを統合した「在り方生き方」について他教科や道徳との関連を考慮した授業実践を行う。 ・「在り方生き方」の学習として，豆腐作り（小学校第1学年），震災に関わった方から話を聴く（小学校第6学年），若松地域学習（中学校第1学年），匠に学ぶ（中学校第3学年）等を実施する。 ・中学校第2学年による小学校第2学年への読み聞かせを行う。 ・授業研究会を6回実施する。 ・「在り方生き方」における新しい7つの内容の視点をもとに，各教科・領域で更なる単元開発に取り組む。 ・小中合同挨拶運動，募金活動を実施する。（児童会・生徒会合同） ・公開研究会（小中一貫教育研究発表会）を開催する。 ・第Ⅱ～Ⅲ期合唱祭の開催，及び，小学校音楽会に中学校吹奏楽部が参加する。

（3）評価に関する取組

第1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・全学年を対象に標準学力検査を実施し，学力・学習状況を測定する。 ・各教科・領域等のカリキュラム試案を作成する。 ・小学校高学年からの教科担任制の実施について評価する。 ・中学校第1学年において，学習及び生活の情意的側面について調査し，教科担任制による中1ギャップの解消について検証する。 ・小学校第1学年から英語科授業を導入することによりコミュニケーション能力の把握と分析をする。 ・体育的行事，文化的行事の相互参加，合同開催実施について評価する。 ・「在り方生き方」のカリキュラムを一部実施し，検証する。
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校第2学年以上を対象に標準学力検査を実施し，学力・学習状況を測定する。 ・学習及び生活の情意的側面について調査し，教科担任制による中1ギャップの解消について検証する。 ・各教科・領域のカリキュラムを作成し，実践を通してその有効性の検証及び修正を行う。 ・体育的行事，文化的行事の相互参加または合同開催について評価する。 ・「在り方生き方」のカリキュラムを一部実施し，検証及び修正を行う。
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校第2学年以上を対象に標準学力検査を実施し，学力・学習状況を測定する。 ・学習及び生活の情意的側面について調査し，教科担任制による中1ギャップの解消について検証する。 ・「在り方生き方」のカリキュラムを実施し，検証及び修正を行う。 ・各教科・領域のカリキュラムを作成し，実践を通してその有効性の検証及び修正をする。 ・体育的行事，文化的行事の相互参加または合同開催について評価する。 ・「在り方生き方」のカリキュラムを全面実施し，検証及び修正をする。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

① 児童・生徒への効果

ア 小中一貫教育

小中9年間を4-3-2の区切りに変更し、各期の重点目標を設定したこと、また、専門性の高い教員による教科指導を採用し、中学校進学の際に小・中学校のそれぞれの立場から見た児童の情報を基に綿密な引継を行ったこと、さらに9年間での授業づくりについて小・中で共通理解を図ったことにより、学校段階間の円滑な接続を図ることができた。

右図のQ-U調査（学校生活における児童生徒の個々の満足感や意欲等を測定できる心理テスト）によると平成22年1月から、各期で上昇傾向を示している。特に、第Ⅱ期においては、上昇傾向が顕著で23%増という結果となった。

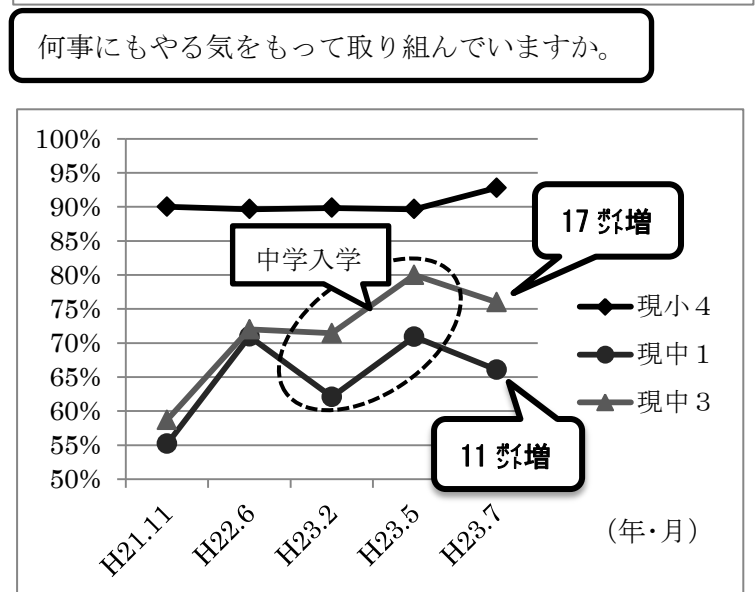
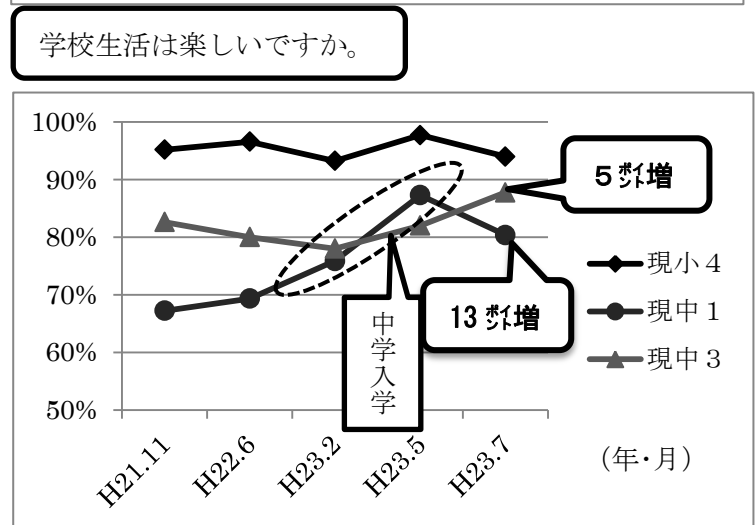
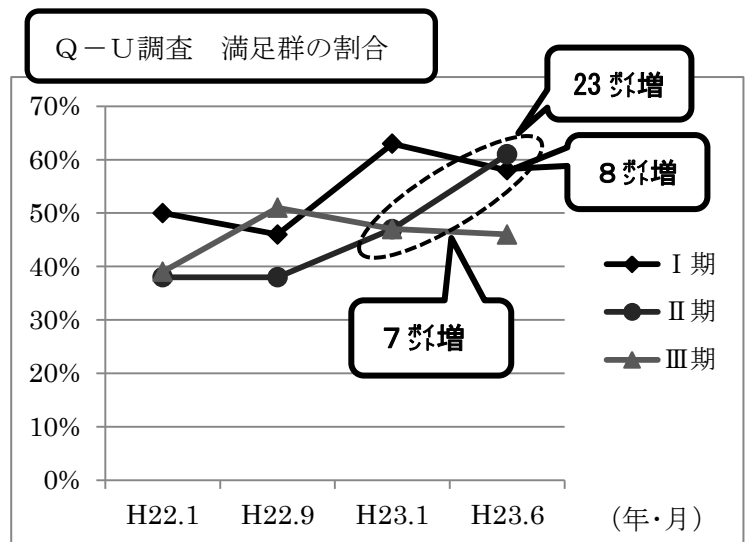
児童生徒の実態アンケートで、「学校生活は楽しいですか」の設問では、第Ⅰ期の現小学校第4学年では、ほぼ横ばい傾向、第Ⅲ期の現中学校第3学年では、5ポイントの増加が見られました。第Ⅱ期の現中学校第1学年においては、13%増と高い上昇が見られた。

「何事にもやる気を持って取り組んでいますか」の設問においても、ほぼ同様の結果が得られた。これらのことから、小中一貫教育における手立ては、小・中学校の段差を適切にすることができたと考えている。

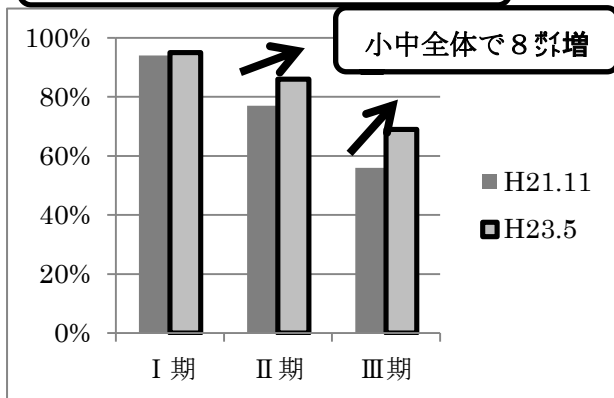
イ 在り方生き方

「総合的な学習の時間」と「特別活動」を統合し、人間としての在り方生き方の視点から目標を設定し、小学校第1学年から自己や未来に向けて学びができるように授業づくりを工夫した。自己形成の視点からねらいを設定したため、体験活動や交流活動の充実が図ることができた。また、「自分にできることを考え、実践する姿」が見られるなど「在り方生き方」での学びを通して視野や認識を広げ、実践する態度が育まれてきた。

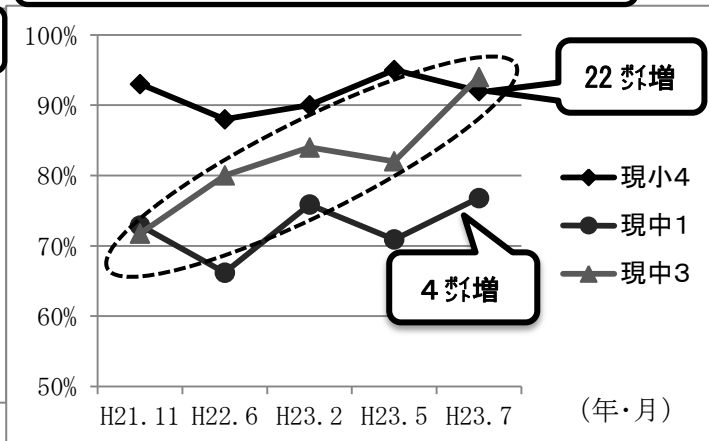
児童生徒の実態アンケートにおいて、本校で最も重視してきた一つである「将来の夢や目標を持っていますか」の設問では、全体で8ポイントの増加が見られた。



将来の夢や目標を持っていますか。



人の役に立つ人間になりたいと思いますか。



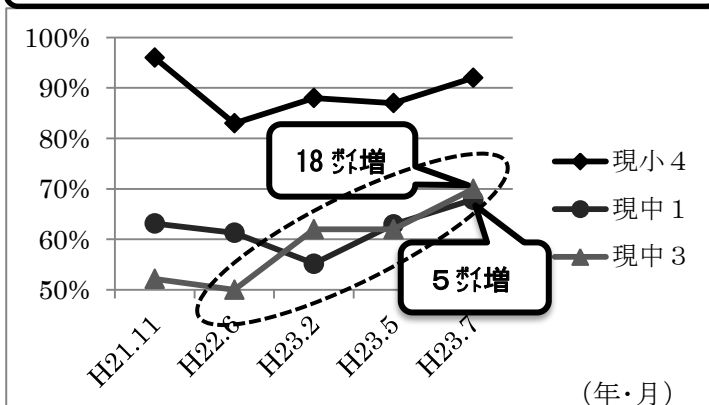
「人の役に立つ人間になりたいと思いますか」の設問では、中学校第1学年で約4ポイント、中学校第3学年では22ポイントの増加が見られた。中学生は実際に、東日本大震災では、町内で起きた液状化による砂の撤去作業や生徒会による義援金の活動を行う等、自主的な行動が見られた。

「難しいことでも失敗をおそれず、挑戦していると思いますか」の設問では、中学校第1学年で5ポイント、中学校第3学年で18ポイントの増加が見られた。これらのことから、在り方生き方での学びは、児童生徒に夢を抱かせ、よりよい自分や社会を築こうとする態度の育成につながったと考える。

また、教師の声として、次のようなことが挙げられた。

- 「やらされる」ではなく「やるんだ」という児童生徒の意識の変容が感じられた。
- 多様な体験・交流を通して、他者との関わり方を考えて発言、行動する必要性を実感させることができた。よい体験や交流の機会が増えた。
- 自分を見つめ直すことを重視してきたことで、心の教育の充実につながってきた。

難しいことでも失敗をおそれず、挑戦していると思いますか。

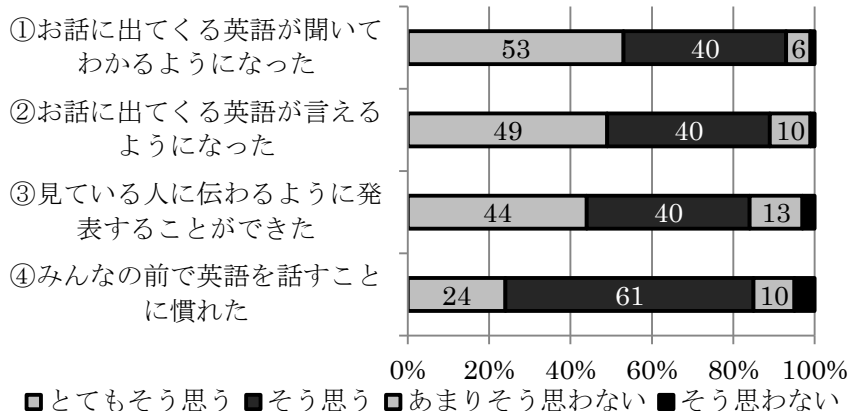


ウ 英語教育

第I期から、文字指導、そして、ドラマ活動を取り入れたことにより、小学校低学年の時期から、アルファベットに興味を持つとともに、英語の読みへの意欲が向上した。

劇の中で役割を与えて英語表現を行うドラマ活動により、英語を用いて積極的コミュニケーションを図ろうとする態度が向上した。

ドラマ活動後の小6児童の質問紙調査の結果



ドラマ活動実施後の質問紙調査の結果が上図であり、「見ている人に伝わるように発

表できた」「みんなの前で英語を話すことに慣れた」と回答する児童の割合は8割強となるなど、達成感や自信を感じている。このことから本校で目指しているコミュニケーション能力が向上していると考えられる。

エ 教科教育

開発した教科カリキュラムをもとに、全教科共通でコミュニケーション能力の向上に力を入れた。教師の声として、次のようなことが挙げられた。

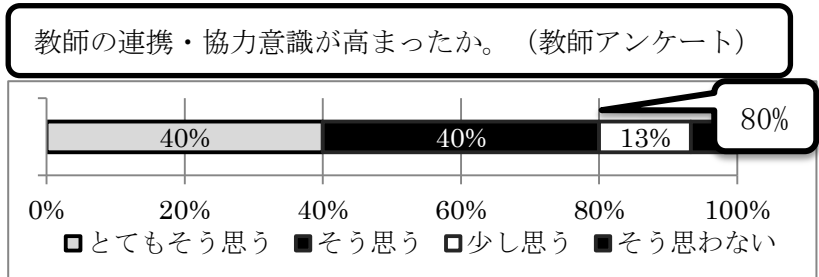
- ひかえめだった児童が自分の意見を進んで発表しようとする姿が見られた。
- 班での話し合いに進んで協力する態度が見られるようになった。
- 聞く相手のことを考え、反応を見て発表方法を工夫することもできるようになった。

② 教師への効果

ア 小中一貫教育

目標や手立てを共有し、実践する中で、「相互の良さを取り入れようとする姿勢が出てくる」など、小・中学校の教師の連携・協力意識が醸成された。

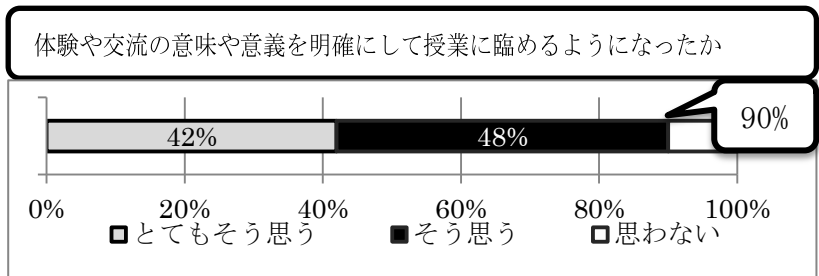
教師アンケートによると、連携・協力意識の高まりを80%の教師が肯定的に受け止めている。



イ 在り方生き方

目標具現に向けての具体的な手立てを検討する中で授業づくりが活性化してきた。

教師アンケートからは、90%の教員が、体験や交流の意味や意義を明確にして授業を展開するようになったと回答した。



ウ 英語教育

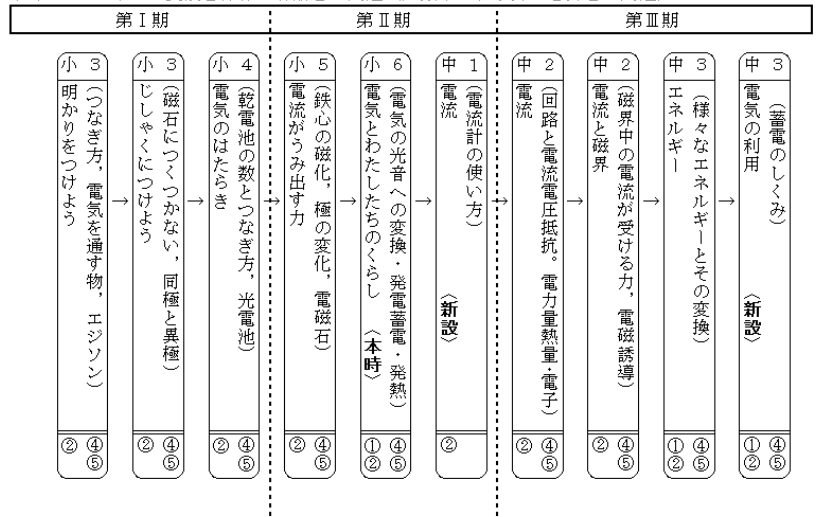
多くの児童は、英語の文字を読むのは難しいという意識を持っており、「もっと英語を読めるようになりたいですか」という質問に対して、全体として96%が読めるようになりたいと答えていた。このように読みへの意欲は高いが、実際のドラマ活動の指導においては台詞を覚えることに気をとられてしまい、英語らしい発音やリズムでなくなる傾向が見られた。従って、このことに留意して指導にあたる必要があることが確認できた。

エ 教科教育

教科カリキュラム一覧表の作成を行うことで、各教科の系統性を考慮した学習指導が充実し、児童・生徒の将来を見据えた授業づくりを行うことにつながった。授業研究においては、指導する単位に関する9年間の系統表を作成することで、児童生徒の先の学習を意識して指導にあたることのできた。

学習内容の9年間の系統性

(1) エネルギーの変換と保存の各期との関連 (丸数字は在り方生き方との関連)



教師の意識調査では、授業研究・研修会を通して、指導の視点の広がりを感じた教師は90%にのぼり、系統性を意識した学習指導ができたと回答した教師は80%となった。これは、9年間カリキュラム作成の成果である。

③ 保護者への効果

授業参観や保護者会、保護者向けのお便りなどを通じて、研究の概要や在り方生き方の意義について説明を行い、理解を得てきた。

第Ⅱ期より、小学校第5学年は英語科、図画工作科、音楽科、第6学年は、理科、英語科、図画工作科、音楽科において、専門性の高い教員からの教科指導を行っている。これについて、保護者の肯定的な回答が全体で91%となった。特に、4教科を専門性の高い教員からの教科指導を行っている第6学年については、肯定的な回答が97%と高い結果が得られた。このことから、保護者のニーズとして、早い段階から専門性の高い教員からの教科指導への期待感が大きいことが感じられる。

また、平成22年度から後援会（いわゆるPTA）は、小中一元化を図り、後援会会長は両校で一人になり、小中一貫の組織に改正された。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

① 実施上の問題点

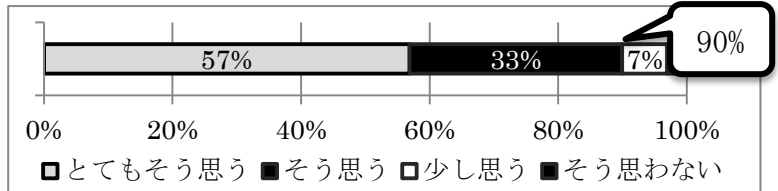
小中一貫教育校においては、学校の一元的な運営を円滑に進めるためにも、校長一人制の実現することが必要である。

② 課題

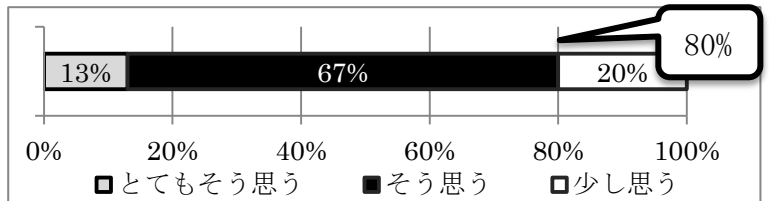
ア 小中一貫教育

「学校生活は楽しいですか」、「何事にもやる気を持って取り組んでいますか」、の問いに対し、現中学1年生と現中学3年生では、中学入学後の5月がピークとなり、その後グラフが下降するなど必ずしも安定したものになっていない。子どもたちの意識の推移に留意しながら、今後、上昇してきた学校生活への意欲をいかに持続させていくかが課題である。

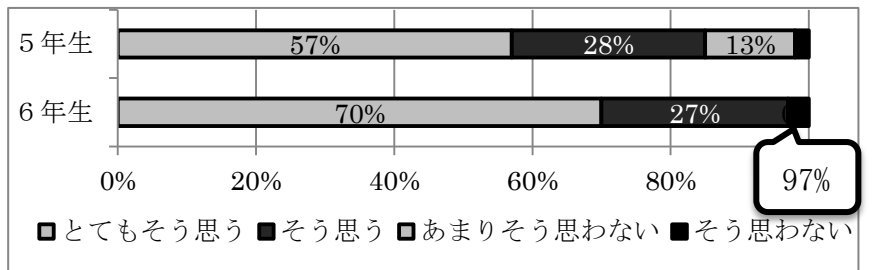
授業研究・研修会を行い指導の視点の広がりがあったか



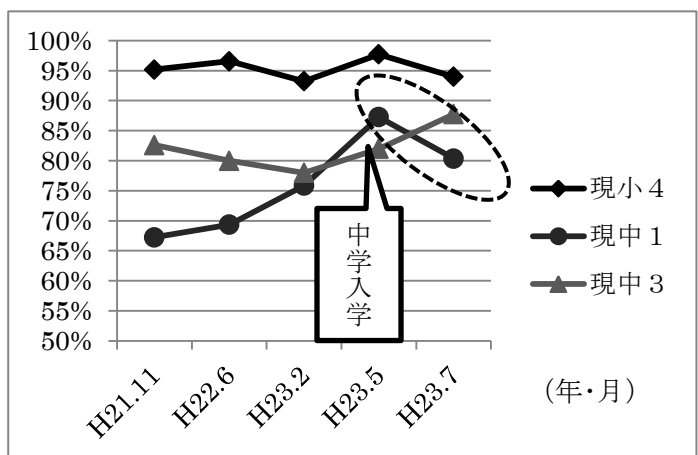
9年間の系統性を意識した学習指導ができたか。



専門性の高い教員からの小学生への教科指導は望ましいか。(保護者アンケート)



学校生活は楽しいですか。



また、この若松地区は大型マンションの建築により、児童生徒数が増加傾向である。小中一貫教育を行う中で、特に第Ⅱ期における乗り入れ授業は、中学校教員の持ち時数の関係もあり可能になったもので、今後、学級数の増加により、実施が困難になることが予想される。

イ 在り方生き方

新しい領域ということでは、教材を開発するために外部の方との連絡調整や、下調べの労力と時間が費やされる。

在り方生き方の難しさを感じることを教師にアンケートをしたところ、「教材づくり」、「準備」の項目のポイントが高くなり、続いて、「授業構想の3つの視点をどのように組み込んでいくか」、また、「評価方法」の項目と続く結果となった。評価の視点として「課題設定・解決力」「人間形成力」「自己形成」の3つを設定したが、このうち「自己形成」の評価について、“内省する力”や“実践する力”を多角的に見取っていく必要があり、そのためにはどのような評価方法があるのかをさらに検討する必要がある。

ウ 英語教育

英語らしく表現するための指導方法を工夫してきたが、指導に中学校英語教員があたったためできた面がある。小学校での英語の指導において、発音を正しくという点については、準備や指導者の育成を十分に行うことが必要である。

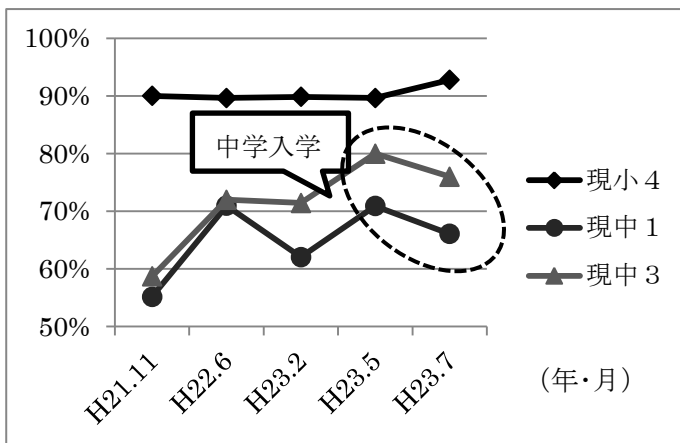
小学校の英語の学習に、文字の指導を段階的に、また継続的に取り入れたことは、児童の英語の読みに対する理解やアルファベットに対する意識に肯定的な影響があったという調査結果を得ることができた。また、中学校入学後、生徒が中学校の英語の学習に比較的スムーズに取り組むことができたことも実感することができた。しかし、中学校の学習が進むうちに、「英語を読むことは難しい」「英語を書くことは難しい」と感じる生徒が少しずつ増えてきていることも事実である。小学校で身につけた力や自信を中学校でさらに伸ばすことができるように、中学校の指導を見直し、工夫していく必要がある。

エ 教科教育

完成した教科カリキュラムをもとに今年度、実践を重ねてきたが、まだまだ不十分な面も多く今後さらに修正をしていくことが必要である。

「在り方生き方」との関連では全学年共通で「コミュニケーション」「課題の探究」について行ってきたが、それ以外の内容については、未着手の状態である。今後、さらに実践を積み重ね、カリキュラムの修正をしていくことが必要である。

何事にもやる気をもって取り組んでいますか。



3年間の児童生徒数の推移

